

源氏物語・若紫の「いたづらに沈めるだにあるを」の解釈

——「だにある」の語法について——

江口正弘

一、はじめに

源氏物語の若紫の巻に次のような文章がある。今、源氏物語大成本によって示すと、

さてそのむすめはとゞひ給ふけしうはあらずかたち心はせなと
侍るなりたいくくのつかさなとよいいことにしてさる心は
へみすなれとさらにうけひかすわか身のかくいたづらにしづめる
たにあるをこの人ひとりにこそあれおもふさまことなり（一五四
頁）

とある文章である。この文章のなかの「いたづらにしづめるだにあるを」以下の部分の表現は、例えば日本古典文学大系の頭注では「つまらない国司などで、落ちおれているだけでも情ないと思っ
ているのであるから、自分の子供は如何にもこの娘一人あるだけなの
だ」とあるが、何となく落ちつかない。「情ないと思っっているの
あるから」という原因を表わす句をうけて「娘一人あるだけだ」の
判断も、文脈の続きが論理的ではない点が落ちつかない理由の一つ
である。又、「しづめるだにある」に「落ちおれているだけでも情
ない」と「情ない」という語で「ある」を言いかえてあるが、その
ような用法の「ある」が他にあるのか。又あるとすると、どのよう

に用いられるのかなども問題点と考えられる。そこで源氏物語のこ
の例を中心に「だにある」の語法について考察するのが小稿の目的
である。

まず本文と諸注から検討することになると、本文ではこの部分に
ついて諸本による異同はない。諸注では、「細流抄」は、

「我身のかくいたづらに」——入道の我身徒に沈むことさへある
にと也

「この人ひとり」——このむすめをたに徒物になさしと也

と注記しているが、問題の中心の「しづめるだにあるを」は「沈
むことさへあるに」といい換えているだけである。岷江入楚は細流
抄と殆ど同じように記している。

「湖月抄」をみると、

「わが身かくいたづらにしづめるだにあるを」——入道が受領の
身にしづみはつるさへあるをせめて此むすめは高位の人にもなさ
んと思ふ也

と注している。これも「しづみはつるさへあるを」と言い換えて
いる。

古注に細かな表現の解説を求めるのは無理であるが、近來の注釈
もそれほど細かな説明はしていない。「日本古典全書」では、「自

分の身がこんなに零落してゐるのに、せめて望をかけるのはこの娘一人だけだ」と頭注を付している。この注は「沈めるだにあるを」を「零落しているのに」と言いかえてゐるが、「ある」については口語訳には殆ど配慮がなされてない点が不満足である。次の「せめて望をかけるのは」の「せめて」は「だに」の口語訳とは思われるが、いずれにせよ意訳に近い言いまわしである。

玉上琢彌博士の「源氏物語評釈」は「自分がこのように受領などに零落したのさえ残念なのに。子はこの娘一人きり。特に思うところがある」と口語訳がなされている。

松尾聡博士の「全譯源氏物語」では「沈めるだに口惜しくあるを、この人沈まばいと口惜しからむ」というような意味。下文を省略して余情をのこした。」と説明され、他に橋姫の例を一例ひいて説明されていて、語法上の説明も加えておられる。

「古典文学全集」(小学館)はかなり詳しく注を付してある。「入道自身の失意を示し、なおさらどうして娘を国司ふせいに許せるものか、という気持。『だに』の下にある『あるを』は『しにかじかであるの』の意。その『しにかじか』の内容は前後の文脈によって定まる。ここでは無念なのに、情けないのに、などの意」と語法からの説明も加えられ、さらに口語訳は「わたし自身がこうしてむなしく落ちぶれていることだけでも無念なのに。子はこの娘一人きりなのだ。」という訳がなされている。

これら諸注のなかでは、松尾博士の「全譯源氏物語」や「古典文学全集」の説明は、語法面の考察にも触れ、ある程度の解説がなされているが、それでも例えば「古典文学全集」では「あるを」を

「しにかじかであるの」の意と結論だけを示してある点、注釈書としては当然ではあるが、なお詳しい説明を求めるむきもあるのではないかと思う。

二、「だにある」の用例と分類

まず「だにある」という、いわゆる副助詞「だに」にラ変の「あり」が接続した形をもつものを、平安および鎌倉時代の作品から抜き出し、「あり」の用法によつて分類すると、次のように考えることができる。

- (A) 「あり」が存在の意味を表わすもの
- (B) 「あり」が表現の意味を表わすもの
- (C) 「あり」が判断を表わし、その内容が示されているもの
- (D) 「あり」が判断を表わし、その内容が明示されず、文脈にゆだねられるもの

この「だにある」という表現は、「だに」のいわゆる軽いものをあげて重いものを類推させる用法より、「あり」の用法によつて意味用法に差異があると考えられるので、右のように分類してその用例を検討してみることにする。

(A) 「あり」が存在の意味を表わすもの

- (1) 車の左右に、大納言殿・三位の中將、二所して簾うちあげ、下簾ひきあげて乗せ給ふ。うち群れてだにあらば、すこし隠れどころもやあらん、四人づつ書立にしたがひて、「それ、それ」と呼び立てて乗せ給ふに、あゆみ出づる心地ぞ、まことにあさましう、頭證なりといふも世のつねなり。(枕草子・大系本二)

(2) 恋しさの限だにある世なりせば年経て物は思はざらまし (古
今六帖・五)

(3) 命だにあらばとたのむ逢ふ事を絶えぬといふぞいと心うき
(落窪物語・大系本一〇六頁)

(1) は「車の左右に大納言と三位の中將のお二方で簾を上げ、下簾をひき上げて、私達女房をお乗せになる」という意味の文に続く場面面で「うち群れてだにあらば……」とは「せめて一所にかたまってでもいるなら少しは隠れ場所もあるう」というのであって、「あらば」は「うち群れた状態で」そこに「いる」という、いわば存在を表わす意味の仮定条件である。

(2) の「恋しさの限だにある世なりせば」とは「せめて人を恋しく思う事に限りがある世であつたら」ということで「ある」は「限」の述語で「限りがある」の意で存在を表わす用法である。

(3) の「命だにあらばとたのむ」とは「せめて命さえあるならば (又お逢いできよう) とたのみにしている」という意味で「ある」は「命がある」ということで、存在を表わしているものである。これら「だに」の下に存在を表わす「あり」がつく用例は比較的多く、

(4) 深きあやまちなくて命だにあらば、をのづからなりのばりなむ。
(夜の寝覚・大系本一三三頁)

(5) わすらるる時だにあらばなにさらにつらきをせめてうらみぞ
らまし (同右三八四頁)

のように用いられている。
(B) 「あり」が表現の意味を表わすもの

ここで「あり」が表現を意味するとは、「あり」が引用の「と」「など」をうけて、「と」とか「と書いてある」などの意味を表わす場合をいうもので、例えば、

九日、菊の綿を、兵部のおもとのもてきて、「これ、殿のうへの、とりわきて、いとよう老のごひすて給へと、のたまはせつる」とあれば、「よくよく老いを拭いとお捨てなさいとおっしゃいましたよ」というので

菊の露わかゆばかりに袖ぬれて花のあるじに千代はゆづらむとて、返し奉らむとするほどに、「あなたにかへりわたらせ給ひぬ」とあれば「あちらへお帰りになってしまわれた」というので「ようなきにとどめつ。(紫式部日記・大系本四四六頁)

右の例文にみえるように「とあり」という形で「と」というの意味になるものである。この「あり」が「だに」につづいて「とだにあり」という形で用いられるものである。

(6) 帯刀が返事に「いでや「降るとも」といふこともあるを、いとくしき御心ざまにこそあめれ。更に聞えさすべきにあらず。

御みづからは、何の心地のよきにか、来んとだにあるぞ。かかるあやまちしいでて、かゝるやう有りや。」(落窪物語・大系本七二頁)

阿漕が帯刀にやった返事に「さてまあ古歌に「降るとも」ということもありますのにひどく薄情なお心持ちであるようですね。全く姫君に申し上げることができさうにもないことです。又、あなた御自身は、どんな愉快なことがあって、来ようと言つのですか」と述べている部分は、同じ「だにある」の形ではあるが、Aのよう

に「あり」が存在を表すというのではない点が異なっている。次の例も同じである。

- (7) 入道「おのれは口てづつにて、人の笑給ばかりの物語は、えしり侍らじ。さは有ども、わらはんとだにあらば、わらはかし奉てんかし」と云ければ、(宇治拾遺物語・高階俊平が弟入道算術事・大系本四〇八頁)

この文でも「私は口べたで、人が笑いなさる程の物語は知りません。しかし何でもよいから笑いたいとおっしゃるのなら、笑わせて御覧に入れましょう」というのであるから、この「あり」も表現を意味するものである。

- (C) 「あり」が判断を表わし、その内容が示されているもの

- (8) かくひきたがへ、何事もなぬめにだにあらぬ御有様をものめかし出で給ふは、いかなりける御心にかありけむ。(源氏物語・蓬生・古典全書本(二)二五七頁)

- (9) 六位といへど蔵人とにだにあらず。(落窪物語・大系本九八頁)
- (10) みし按察使殿のおはして、物などおほせ給へかめりしは、あはれにもありけるかな、いかなる世に、さだにありけん、おもひつゞくれば、(蜻蛉日記・大系本一四五頁)

この(8)・(9)・(10)の「あり」はAの存在を表わす用法や、Bの表現を表わす用法と違って「……デアル」という判断を示すものである。その判断の内容は「あり」の直上の文節に連用形、あるいは連用形を含む文節や副詞などによって示される。(8)では形容動詞の連用形「なのめに」を承け、「並々でさえない御様子」という表現であり、(9)は「に」すなわち断定の助動詞「なり」の連用形をうけ「蔵人と

なり」の否定「蔵人というのでさえもない」という意味である。このような「あり」は文節相互の関係としては、上接の文節とは補助の関係となり、いわゆる補助文節をつくるもので、したがってこの「あり」は補助動詞といわれるものである。(10)の例は判断の内容は「さ」という副詞によって示されたものである。

- (D) 「あり」が判断を表わし、判断の内容が明示されず、文脈にゆだねられるもの

次に示す「あり」は、「あり」が判断を表わすという点では、Cと同じであるが、Cのようにその内容が上の文節に示されていない点が異なっている。

- (11) 御手は、昔だにありしを、いとわりなうしじかみ、彫ふかう、強う、固う書き給へり。(源氏・行幸・全書本(三)二五五頁)

- (12) 雪とのみふるだにあるをさくら花いかにちれとか風のふくらん(古今集・八六)

(13) 乗りつる所だにありつるを、いますこしあかう、顕證なるに、つくるひ添へたりつる髪も、唐衣の中にてふくだみ、あやしうなりたらん、色の黒さ赤さへ見え分かれぬべきほどなるが、いとわびしければ、ふともえ下りず。(枕草子・大系本二九五頁)

このDに示す「あり」はAのような存在でもなく、Bのように「と」をうけての表現を意味する用法でもない。又、Cのようにその内容が直前に示されての判断でもない。(11)は「筆跡は『昔だにありしを』大へんひどく縮かみ、彫りこんだようで、強く、固くお書きになっている」というのであるから、「昔だにありしを」は「若い昔さえそうだったが、今度はまして」というのである。すなわち「あり」

の内容は直接示されていない。ただ「昔だに」とあるから「昔」を軽いものとして示し、程度の甚しい現在のあることを暗示していると考えられる。したがって「昔デサエ（……デ）アツタガ」という意味で「あり」は判断を表わすが、その内容は直接は示されていないと考えられる。ただ以下の「いとわりなうしじかみ、影ふかう、強う、固う書き給へる」事実が「昔だに」という表現から「今度の筆跡」について述べたものであることを示すため、「昔だにありし」の内容は「昔デサエソウ（しじかみ、影ふかう、強う、固う）デアツタガ」の意味であることが考えられる。

⑪はこのように「だにある」以下の表現が直接「あり」の判断の内容にかかわるが、⑫の例も、直接ではないにしても、以下の表現からは「あり」の内容は推定される。「さくらに風が吹いて、花が散るのは惜しいものである」とする人々の通念が下の句で表現されているから「雪とのみふるだにあるを」は「風がなくても」まるで雪のように散るのでさえ惜しく思われるのに」の意味であると考えられる。

又⑬の例は「関白殿二月廿一日に」の段で、「乗りつる所だにありつるを」とは、「車に乗った所でさえ（そうで）あったのだが」の意味で、「あり」の判断の内容は文脈にゆだねられていて明示されていないが、以下の叙述の「いますこしあかう、顕證なるに……色の黒き赤ささへ見え分かれぬべきほどなるが、いとわびしければ」からみて、「車に乗った所でさえ、明るくて恥しかったのだが」の意味だと考えられる。

右の⑪・⑫・⑬の例から「あり」が判断を表わし、その内容が文

脈にゆだねられる用法があることは理解できると思う。

ところで冒頭の「かくいたづらにしづめるだにあるを」という表現は、右のA・B・C・Dの分類からみれば、明らかにDに属すると考えられる。そこで、以下このDの、「あり」の判断が文脈にゆだねられている表現をさぐって、さらにこの語法を細かに考察することにする。

三、意味内容を文脈にゆだねる「あり」の用法

「あり」が判断を表わし、しかもその内容が文脈にゆだねられる用法は、又いくつかのパターンに分類して考えることができる。例えば、枕草子の次の例なども「あり」の判断の内容は文脈にゆだねられているものである。

⑭ 宮仕人のもとに來などする男の、そこにて物食ふこそいとわりけれ。食はする人も、いとにくし。——中略——いみじう酔ひて、わりなく夜ふけてとまりたりとも、さらに湯漬をだに食はせじ。心もなかりけりとて来すは、さてありなん。里などにて、北面よりいだしては、いかがせん。それだになほぞある。(枕草子・大系本二四二頁)

この例では、はじめに「：物食ふこそいとわりけれ。食はする人もにくし」とあるので「私宅などで召使が台所から出した場合は、どうしようもない」といって、「それでもやはり『わりし』』といふことを、「なほぞある」と述べたもので「ある」は先行の批評のことばを承けている筈である。前に「わりけれ」「にくし」と批評のことばがあるから、ここではむしろ繰返すことをせず「それだにな

ほぞある」と「ある」だけで表現したものと解すべきであろう。

「あり」が判断を表わし、内容を文脈にあずける用法は、右の④のように、先行の叙述をうけて「ある」と表現する例よりも、以下述べるように、「こそあれ、こそあらめ」や「だにあるを」などと、ある文型をもって表現されることが多い。まず「こそあれ」の文型から述べることにする。

⑤ 今こそあれ昔はをとこ山さかゆく時もありこしものを
(古今集八八九)

⑥ 思ひ出でてしのぶ人あらむほどこそあらめ、そもまたほぞなく失せて聞き伝ふるばかりの末々は、あはれとやは思ふ。徒然草三〇段

この⑤・⑥の例では「あり」の判断の内容はそれ以前には全く触れられていない。しかし例えは④では「今こそ」と「昔は」との対をなす表現と、「あれ」の内容を明示しない判断に対し、「さかゆく時もありこし」の対立が注目される。「今こそ———」で「あれ」昔は男山の坂のように栄えたこともあった」というのであるから「あれ」の内容は「栄えたこともあった」と反対で「今こそ落ちおれているが」の意味であると考えられる。すなわち、今、文型の骨組みだけを示すと、

今こそあれ 昔は 栄ゆくこともあり

のように「Aこそxニあれ、BはY」の文型で、「あり」の内容「x」は「Y」と反対、「xニ—Y」というように考えられる。

これを⑦であると、これも、

思ひいでてしのぶ人あらむほどこそ あらめ、聞き伝ふるばかり

の末々は、あはれとやは思ふ。

のように「Aこそxニあれ、BはY」と考えられ、「あらめ」の内容、xは「あはれとやは思ふ」と逆になるから、「思い出して思ふ人がいるうちこそあはれと思うだろうが」の意味である。このように「こそあれ」の場合、「あれ」の内容は以下の叙述とほぼ反対の内容となると考えられる。次の⑦・⑧も同じである。

⑦ 三条院のおはしましけるかぎりこそあれ、うせさせ給ひにけるのちは、よのつねの東宮のやうにもなく、(大鏡・大系本一〇二頁)

⑧ かすかに心細き御住居に、年さへ隔たりぬると、あさましく思さる。さぶらふ人々も、しばしこそあれ、いみじく屈じにたり。(増鏡・大系本四七八頁)

⑦では、「三条院が生きていらっしやうた間は世のつねの東宮のようであったが、なくなった後は世間の普通の東宮のようでもなく」の意味であり、これも「Aこそxニあれ、BはY」の文型である。次の⑧は「お側にお仕えする人々もしばらくの間はまあ元氣であったが、(今では)すっかりふさぎこんでしまっている」という意味である。そしてこの場合「Bは」にあたる叙述は省略されていると考えられる。

以上④から⑧までの例でみたように、これらの「こそあれ」は、普通「Aこそ(xニ)あれ、BはY」の文型をとり、「Aこそ(xニ)あれ」は、以下の「BはY」の判断に対する逆接の前提条件句を構成している。xの内容がYと反対の判断となるのは、この逆接の前提条件句であるため、この句を作る機能は「こそ——已然形」

の係結の用法によることは、説明を要しないことも思うが、一言ふれると、

○中垣こそあれ、一つ家のやうなればのぞみてあづかれるなり。(土佐日記・二月十六日)

○春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えぬ香やはかくるる(古今集四一)

右の文で「中垣こそあれ」は「隣との隔ての垣こそあるけれど、同じ家のものである」の意味だし、「梅の花色こそ見えぬ香やはかくるる」とは「梅の花は闇で色こそ見えないが、香はかくるるか、いやかくれはしない」というように、下の叙述に対し逆接の前提条件句を作っているが、それは「こそ——已然形」の機能によるものである。

以上「あり」が判断を表わし、その内容が文脈にゆだねられる用法の中で、「こそあれ」「こそあらめ」の形で、それがそれ以下の叙述の前提条件句となつて、その判断の内容が以下の叙述とほぼ反対の内容をもつということについて述べた。

このような判断の内容を文脈にゆだねて「あり」だけで示す用法は、次のようにも用いられている。

23 椎の木はいづれもあるを、それしも、葉がへせぬためにいはれたるもをかし。(枕草子・大系本八八頁)

この部分を大系の頭注は「常緑樹は他にいくらかもあるのに、椎の木に限って落葉しない例に言われたのも面白い」として「いづれも」を「他にいくらかも」とし、「ある」は存在の意味に解釈してあるが、ここはむしろ、

常磐木は ^Aいづれも ^Bあるを ^Cこれしも ^D葉がへせぬ……

のように解して「ある」の判断の内容は文脈にゆだねられているとみるべきものである。「常磐木はどれも葉がえしないのに、この椎の木だけ、葉がえしない例に言われるのも面白い」の意味である。そうすると、この「もあるを」の場合の「あり」の判断は、下の叙述「Y」の内容とほぼ等しいと考えることができる。

「あり」が判断を表わし、その内容が文脈にゆだねられていると考えられる文型には、右の「こそあれ」「もあるを」のほかに、次のように「はあれど」の文型をもつものがある。

20 みちのくはいづくはあれどしほがまの浦こぐ舟のつなでかなしも(古今・一〇八八)

21 玉くしげ覆ふを安み開けて行かば君が名はあれど(君名者雖有)わが名し惜しも(万葉・九三)

22 故郷の飛鳥はあれど(飛鳥者雖有)あをによし平城の明日香を見らくし好しも(万葉・九九二)

23 筑波嶺の新桑繭の衣はあれど(伎奴波安礼杼)君が御衣しあやに着欲しも(万葉・三三五〇)

24 妹とありし時はあれども(時者安礼杼毛)別れては衣手棄きものにそありける(万葉・三五九一)

「はあれど」の文型は、右のように万葉集に数例および古今集の例のように和歌に用いられているが、「こそあれ」や「もあるを」のように「あり」の内容と以下の叙述との関係がはっきりしない。佐伯梅友博士は「いづくはあれど」を中心に、この表現について考察されている。博士は「いづくはあれど」は「他のどこはとにかく」

と口語に言いかえはするものの、文法的に考えると「いづくはかなしからずあれど」という意味で、「はあれど」は以下の叙述とおよそ反対と解すべきであると考えられる。^(注1) ④の歌のように「妹とありし時は」と「別れては」というように「Aは(xニ)あれども、BはY」の「Aは」と「Bは」が係助詞「は」で提示されている時は、「妹」といた時は舞くはなかつたけれど」と以下の叙述と反対の「x」を想定しやすいが、他の例では、はたして反対になるものかどうか考えさせられる。むしろ「君が名はあれどわが名し惜しも」や「故郷の飛鳥はあれど：平城の明日香を見らくし好しも」などは、「もあれど」ほど積極的ではないにしろ、Yと同じ方向での提示であるようにも考えられる。これらの例は「君が名はともかく：」「飛鳥はともかく：」と訳す通説が捨てがたい表現だと考えられる。

以上「あり」が判断を表し、その意味が文脈にゆだねられるものは、

① Aこそ(xニ)あれ、BはY

② Aも(xニ)あるを、BしもY

③ Aは(xニ)あるを、Bは(し)Y

というような文型にまとめることができ、Aの叙述はB以下の叙述の前提条件句となっている。そのため(x)の内容はYの内容とかわりあい、①ではxはYの反対、②ではxはYと同じ、③ではxの内容は、ある場合は弱いながらもYと反対になり、またある場合は「Aはともかく」とBに対立する存在としてのAを示すにとどまるという意味となることを考察してきた。そしてそのxの内容が異なる理由は、語法上「こそ——已然形」や「も」「は」による遣

いであると考えられる。

四、「だにある」について

「あり」が判断だけを表わし、その内容を文脈にゆだねる用法は、前節に記したように用いられるから、「だにある」の用法も「Aだに(xニ)あるを、BはY」という文型で用いられるのが典型的なものと考えられる。次にその典型的な文型から考察することにする。^(注2) 伊豆守これをつたへきよて「身にかへておもふ馬なれども、^(注3) 權威につみて取らるゝだに^(注4)もあるに、馬ゆへ仲綱が天下のわらはれぐさとならんずこそ、安からね」とて、(平家物語・大系本二九二頁)

右の文では、「權威につみて取ら」れるのでさえも(安からず)あるのに」の意味で、「ある」の内容はYの「安からず」とかわわっているのは明らかである。

④ 祇王「こはさればなに事さぶらふぞ。わが身にあやまつ事はなけれ共、すてられたてまつるだに^(注5)あるに、座敷をさへさげらるゝこと^(注6)の、心うさよ、いかにせむ」とおもふに、(平家・大系本一〇二頁)

この例においても「すてられたてまつるのでさえも(心うさ)あるのに」に近い意味である。「だに」は軽いものをあげて重いものを類推する副助詞とされる。したがって「Aだにあるを」の表現は、以下の「BはY」の判断に対して、軽いものの提示としての叙述である。^(注7) では「權威について取られるのでさえ残念であるのに、まして天下の笑われぐさとなることは堪えられないことである」とい

うことであり、26では「すてられるのでさえつらいのに、まして座敷までも下げられることのやりきれなさよ」というのである。「Aこそ(※ニ)あれ、BはY」では、※ニYであったが、この「Aだに(※ニ)あるを、BはY」では、Yの内容は※ニAというように考えられる。ただ、この「Aだにあるを」の文型は「だに」に類推の機能があるため、「Bは」の提示が省略されたり、いくらか変形された形で表現されることも多い。

27 出で入り給ひし方、寄り居給ひし真木柱などを見給ふにも、胸のみ察りて、物をとかう思ひめぐらし、世にしほじみぬる齡の人だに、あり、まして睦び聞え、父母にもなりて生ほし立てならはし給へれば、恋しう思ひ聞え給へる、ことわりなり。

(源氏・須磨・古典全書本(一)一四二頁)

28の文は紫上が源氏を偲んで嘆いている場面である。「物をとかう思ひめぐらし、世にしほじみぬる齡の人」(物事を何かと思慮分別し、世なれた年令の人)がAであるが、これに対するBは「Bは」という提示の表現ではなく「馴れ睦び聞え、父母にもなりて生ほし立てならはし給へれば」(紫上は源氏になれむつび申し上げ、源氏は父母にもなってお育てになってこられたから)という表現になっている。ただ「あり」の内容は、Yの「恋しう思」う事とほぼ同じ内容である。すなわち28の文では「Bは」の表現がいくらか変った形で叙述されている点が、29・30の文と異なっていると考えることができる。

29 次の例も28とほぼ似た表現である。

30 かかる時のやむごとなき上達部の、重くわづらひ給ふに、親

兄弟あまたの人々、さるたかき御中らひの歎きしをれ給へる頃ほひにて、ものすさまじきやうなれど、月々にとどこほりつる事だに、あるを、さて止むまじき事なれば、いかでかは思しとどまらむ。(今まで月々差支えていただけでも困った事であるのに、そのままにしてもおけないことなので、御中止にもなれない) (源氏・若菜下・全書本(四)二二二頁)

30の例も「Bは」の提示の仕方が29・30ほどは、はっきりなされていない。

又、「Bは」にあたる表現が全くなされない場合も多い。

31 掻きならし給へとあなたに(あちらの姫君達に)聞え給へど、思ひ寄らざりしひとりごとを、聞き給ひけむだに、あるものを、いとかたはならむと、ひき入りつつ、みな聴き給はず。(源氏・橋姫・全書本(四)二四二頁)

32 木曾といふ所は、信濃にとつても南のはし、美濃さかひなりければ、都も無下に程ちかし。平家の人々もれきひて「東国のそむくだに、あるに、こはいかに」とぞさはがれける。(平家・大系本(四)〇四頁)

33 御手は、昔だに、ありしを、いとわりなうしじかみ、ゑり

34 ぶかう強う、固う書き給へり。(源氏・行幸・全書本(三)二五五頁) 35では「聞かれてゐるなど」思いもよらず弾いていた独り琴をお聞きになられたというのでさえも、はずかしいの」という「Aだに(※ニ)あるものを」に対して「薫君の目の前でお弾きすること」とは「Bに当る表現が省略されて「いとかたはならむ(大麥見苦しいことでしょう)」という表現と解される。36では「東国が

そむくのでさえも（油断ならぬこと）であるのに」というのが「Aだにあるに」にあたるから、その下に「木曾が反乱をおこすとは」という「Bは」の省略が考えられ、「木曾が反乱をおこすとは」これはどうしたとか」というのである。②では「昔だにありしを」に対して「今も」または「この御手も」という「B」にあたる言葉が省略されていると考えることができる。

「Aだにあるを、BはY」の文型が考えられるこれらの表現は、「Bは」という提示が省略されるだけでなく、「Y」という判断も明示せず、前後の叙述でそれを感じとらせるというような表現をとることもある。もちろんこのような場合は、「Aだにあるを」というだけで「あり」の判断の内容が理解できるのが普通である。

③ ひと所だにあるに、また前駆うち追はせて、同じ直衣の人ま

ゐり給ひて、これはいますこしはなやぎ、さるがう言などし給ふを、(枕草子・大系本二三三頁)

この③の例では「ひと所」に対して「おなじ直衣の人まゐり給ひて」の叙述があるし、さらにそれより前の「大納言殿が参上されて、自分の姿を見られることが非常に恥しい」という叙述があるために「ひと所だにあるに」で「お一人でさえ恥しいのに」とははその内容が理解できるものである。

又例文④の「雪とのみふるだにあるをさくら花いかにちれとか風のふくらん」(古今・八六)でも、はっきり「Y」を明示してないが「風が吹いて花が散るのは惜しいものである」とする通念をもつて下の句を読むと、上の句は「風がなくても」まるで雪のように散るのでさえ惜しく思われるのに」の意味であると考えられるので

ある。

以上「ある」の内容を文脈にゆだねる「だにあるを」の用法を検討してきたが、典型的な文型は「Aだに(ヤニ)あるを、BはY」の形が考えられ、「ある」の判断の内容「x」は*Aの關係で「Y」の判断とかわるということが出来る。そしてこの「Aだにあるを」の表現は「だに」が軽いものをあげて重いものを類推する助詞であるため、「Bは」という重いものを示さなくても、当然その表現意図が遂行されるため「Bは」が省略されることも多く、又「Aだにあるを」の「ある」の判断が、先行の文意によって明らかであったり、あるいは「A」の内容によって当然考えられる判断の場合は、以下の「BはY」という判断も省略し、言外に類推させる表現となると考えられる。

冒頭の若紫の「わが身のかくいたづらに沈めるだにあるを、この人ひとりにこそあれ、思ふさまことなり」においては「わが身のかくいたづらに沈める」が「A」にあたり、これに対する「B」や「Y」は全く表現されていない。しかし「わが身がいたづらにしづめる」ことが軽いものとして示されているから、類推される重いもの「B」は「娘までが地方官の妻となること」である。すなわち「自分の身がこうむなしく落ちぶれているのでさえ残念なのに、娘までが国司の妻となることなどは、本当に堪えられないことである」というのである。文として表現されているのは「わが身のかくいたづらに沈めるだにあるを」ということだけで以下は省略されているが、この部分が表現する意味は「代々の播磨の国司が娘の婿になりたい意向を見せる」という叙述に続く表現だから、むしろ「娘

「までが国司の妻となることなどは、全く考えられないことだ」という方に重点があるはずである。しかしその「BはY」にあたる部分を表現せず「Aだにあるを」だけで言い切り、その最も言いたい「BはY」にあたる「娘までが国司の妻となることなどは、全く考えられない」という叙述を、その文型のもつ類推の機能に任せて表現していないのが「わが身のかくいたづらに沈めるだにあるを」という表現なのである。

注1 「みちのくはいづくはあれど」(『万葉語研究』所収)

(熊本女子大学教授)